# 五、方言学

都竹通年雄

## 一、あらまし、そのた

昭和三〇年秋、アメリカから李方桂先生がいらっしゃった時、服部四郎先生は李先生に向かって「国立国語研究所の研究はあまりにも統計学的であって、言語の構造の研究を軽んじている。日本にはたくさんの方言研究家がいるけれどその研究はきれぎれな(Sporadic)ものであって、体系的なものではない。ほんとうの、構造的な体系的な研究はこれから現れるだろう。」と、またグロータース先生は「日本に柴田武氏などの研究家がしっかりした研究をしている。」とおっしゃった。(なお「言語生活」昭和二八年九月号の服部先生の「方言研究私見」をも見てください。)

さて、日本のたくさんの研究家の長年の涙ぐましい努力にもかかわらず、理想的な方言書はまだ日本には一冊もない。数十年前から今に至るまで方法論の議論で堂堂めぐりをやっている。しかし、毎年現れるおびただしい論文のうち一部分をでも読めば、日本の方言学の水準は、わずかずつではあるが一年一年と着実に進歩していることがわかる。

日本でのこの方面のカナメと言うべき国立国語研究所の地方言

**語調査室**では、敬語についての調べをまとめあげた（柴田武氏・上村幸雄氏が研究発表会で発表）。この年度からここは日本語の言語地理学的調査を始めることになって、ここの係員およびグローバース先生が四国・中国地方へ下調べとして現地調査にお行きになった。調査語を選ぶ役は徳川宗賢氏。一一月二一日に全国の地方調査員を集めて、国立国語研究所主催の言語地理学についての研究発表会が開かれた。この時、柴田氏・徳川氏は「同じ意味がどのように地理的分布を示すか」の問題を出し、「等語」(isogloss)にならって「等義」(isoseme)と名づけなさったのは画期的と思われる。この席で青木千代吉氏は「各地域の土語のうちで、その単語がなくては気持を表わせない、つまり、共通語やほかの方言ではその地方人の気持を表わせない単語を集めてみよう」と提案なさった。

九学会でのアマミ大島共同調査では、上村幸雄氏・長正三氏が現地調査なさって、その後の発表会で発表なさった。この時は音韻体系調査と言語年代学的調査とがおも。別にアマミ大島には上村孝二氏と、東京大学講師、ドイツ人、ギュンター・ヴェンク氏との現地調査があった。琉球では、あの激しい戦争で荒れ果てたのち、物質生活でひどくこまったので、今から二年ほど前までは研究が無かった。おととしあたりから琉球大学の仲宗根政善氏が方言研究をお始めになって、御郷里、今帰仁村与那嶺の方言集の原稿をお書きになった。ほかにこの年に鐃平名浩太郎氏の「池間島民俗誌」の原稿が出来た。

東条操先生はあいにく御病気中。御回復をせつに待ち望む。

**口先発表**ではまず国語学会の研究発表会（一一月一九日）をあげねばならないが、これは雑誌「国語学」24にゆずる。次に、国語学会の中国四国支部の例会には方言関係の発表が多い。（題目は「国語学」24にゆずる。）音声学会の研究会では、六月二五日に東京で、加藤信昭氏の「千葉県北部方言音調のアクセントの推移」、渡辺富美男氏の「山梨アクセントと共通語アクセントの境界」、山名邦男氏の「四国アクセントの考察」の発表があった。日本コトバの会は「学説をわかりやすく、かみくだいて説明する」ことを主義とするもので、これに方言部会ができて（東京都目黒区三谷町一一一、武藤辰男氏方）、月に一回研究会を東京都立大学でやっている。この会での話の題目とあらましとは雑誌「日本のコトバ」の5号および6号にのっている。そのうち野元菊雄氏の発表は、被調査者何人について調べれば（共通語の形や、共通語によってゆがめられた形でなく）正しい方言形が得られるかという研究と、調査者は土地者でもよそ者でもかまわないという結果と、「一つの方言の体系的調査のためには、適当な被調査者がみつかれば、その人を相手にして三日でも五日でも現地にとどまって調べるべきだ」という意見で、この意見は、これからの方言研究にはひじょうに大事な意見である。民主主義科学者協会（民科）の言語部会では六月一三日に宮島達夫氏の「茨城方言文法の体系について」（水海道市の旧三妻村の方言の内省的研究）の発表があつた。一二月二五日に沖縄文化協会で、徳川宗賢氏の「宮古島の方言」、上村幸雄氏の「奄美大島の方言」の発表があった。

なお、仲原善忠氏は沖縄文化協会主催で、毎月東京でオモロの講義をなさっており、宮良当壮氏は東京の武蔵野女子学院で秋冬に毎週、「琉球文学講座、組踊、銘苅子の研究」の講義をなさっ

た。

日本放送協会（NHK）の「ことばの研究室」では夏から一週間に一度「方言の旅」の放送をした。これのあらましは「NHK国語講座」にある。（のちにのべる。）NHKの「声のライブラリー」では、各県二カ所ずつの方言を録音してくださったことはありがたいが、一つの県でたった二カ所では「文化国家」の体面が保てなくて恥ずかしい。こういう中で大分放送局と甲府放送局とが、もっとたくさんの土地で録音してくださったことを、あつく感謝する次第である。われわれが現地調査の時、適当な年寄の被調査者をさがすのに苦労する。そこで大久保忠利氏がおっしゃるには、「今のうちに『被調査者分布図』というようなものを作って、『どこそこのだれの所へ酒を持ってゆけば喜ばれる』というようなことが一目でわかるようにしておきたい」と。

ブレンダル（Brndal 日本ではブレンナルと呼ばれることが多い）氏の論文は二十数年後の今に至るまで日本語に訳されていない。二千三百年前のインドのパーニニ（Pāṇini）の方法でさえも今の日本では生かされていないようである。学問上のジャーナリズムは、こどもがチンドン屋を追いまわすような事を改めるべきである。それから、「歌を忘れたカナリヤ」に歌を思い出させるようなことをやるべきである。

## 二、印刷物（地域別）

大学紀要は不便なものであるから、来年からやめて、その代わりに国語学会が何種類もの専門別の雑誌を出してもらいたい。それの編集や発行を全国のいくつかの大学に受け持ってもらいたい。雑誌の名まえには「国語」「国語研究」「方言研究」などの、まぎれる名まえをさけてもらいたい。さて、次に書くものには見落としやひいきがあるかも知れないが、どうかお許しを願う。

まず北海道では宮良当壮氏の「北海道方言調査の旅」（北海道新聞八月五日）、石垣福雄氏の「方言の旅、北海道」（国語講座一の二）、平山輝男氏の「北海道地方の方言」（国語学辞典）、単行本として渡辺茂氏の「北海道方言集」がある。

奥羽では此島正年氏の「方言の旅、青森県」（国語講座一の三）、日野資純氏の「津軽方言の文法に関する一考察」（国語学20、大事な論文）、日野氏の「弘前弁そこはかとなく」（言語生活八月）、能田太郎氏・能田多代子氏の「五戸むかしこ集」（民間伝承19の2、昔話集）、工藤祐氏「買物言葉」（民間伝承九月、西津軽郡）、佐藤喜代治氏の「方言の旅、宮城県」（国語講座一の二）、横山辰次氏の「仙台ことば」（言語生活一二月）、芳賀綏氏の「方言の旅、秋田県」（国語講座一の一）、芳賀氏の同じく「山形県」（同じく一の四）、望月信彦氏の「飛島方言の研究―アクセントの部―」（駒沢大学の「方言研究」Ⅱ）、また山形方言研究会（山形大学文理学部国文学研究室内）の雑誌「山形方言」3号には菊池清助氏（山形市立四中）の「中学生語―くだけた場合の話し言葉―」（会話を書き取った大仕事）、奥山誉男氏（尾花沢高）の「わが村のボンボをめぐって」、松下圭道氏の「ダタのこと」、菊池清助氏の「山形の主婦とことば」、佐藤昭氏・中村美恵子氏の「『頭』・『小刀』・『シャベル』の方言」があり、別に大井五郎氏の「作文にあらわれた方言（西田川郡加茂）」（言語生活三月）があり、単行本に金儀右衛門氏の「小国方言集、名詞篇1」、同じく「名詞篇2」

がある。これは金氏が長年努力なさったたまものので、この年の成果の一つ。これに柴田武氏の音韻体系表がついている。これの題に「置賜・下越対照」とあるが、本文にはみつけだせなかった。西村山郡に矢作春樹氏の「河北地方の方言」がある。また奥羽には蒲生明氏の「福島方言」（民間伝承九月）、田口孝之氏の「方言の功罪」（教育心理三の八）、田口氏の「訛語によるわざわい」（教育心理二の四。キ・チなどの音韻の福島あたりでの分布。大事な論文）、高木誠一氏の「磐城北谷の話」（常民文化研究75として）、柴田武氏の「東北人のことば」（日本文化風土記、東北篇）、北条忠雄氏の「奥羽地方の方言」（国語学辞典）がある。

**関東ではNHKの方言の旅として野元菊雄氏**（茨城県、国語講座一の二）、中沢政雄氏（栃木県、同一の三。群馬県、同一の一）、大岩正仲氏（千葉県、同一の四）、金田一春彦氏（東京都、同一の一）があり、別に中村通夫氏、金田一春彦の「東京語」（国語学辞典）、中村昌治氏の「北相模に生きる古語」（民俗12）、金田一春彦氏の「関東人の言葉」（日本文化風土記、関東篇）、金田一氏の「関東地方の方言」（国語学辞典）がある。

**中部地方東部の越後にはまず東蒲原郡PTA連合会編の「東蒲原郡方言調査報告書」**第一輯があって、中に薄冬人氏の「東蒲における会津越後方言の境界線」、渡辺綱也氏の「東蒲原郡の方言」をふくむ。渡辺氏の論文は家族の呼び方・人称代名詞のくわしい分布であって、この本の大部分を占める。ほかに本間てき氏の「中蒲原郡五泉町の昔話」（日本民俗学三の一）、竹内三一郎氏の「西蒲原郡方言の語法」（高志路一六一→一六五）、金塚友之氏の「蒲原低湿地帯のあれこれ」（高志路一六一）、水沢謙一氏の「古志の昔話」Ⅰ・Ⅱ（高志路一六一、一六三、良い資料）、平山輝男氏の「新潟県南部のアクセント境界線について」（音声学会会報八八。越後の西境）がある。佐渡には岩井隆盛氏の「能登から見た『佐渡ことば』」（言語生活五月）、高島康吉氏の「サロ弁について」（同）がある。丸山久子氏の「佐渡の昔話」（日本民俗学三の一）は録音の筆記で、この年の大きな成果の一つ。日本の方言学は昭和の初にも民俗学者にみちびかれ、ちかごろもまた民俗学者に追い越されている。中部地方東南部では青木千代吉氏の「方言の旅、長野県」（国語講座一の一）、牛山初男氏の「長野県諏訪郡地方方言の共通語化について」（信濃七の九、七の一〇）、松村光喜氏の「伊那路をかざる植物(2)」（伊那三）、安間清氏の「チョボクレ唄一篇」（信濃七の一〇。得がたい資料）、金田一春彦氏の「方言の旅、山梨県」（国語講座一の三）、大山学氏の「北巨摩アクセントの研究」（駒沢大学の「方言研究」Ⅰ）、望月信彦氏の「奈良田部落の音韻の研究」（同）、望月誼三氏の「方言の旅、静岡県」（国語講座一の一）、広沢憲雄氏の「伊豆西海岸方言の特色」（文化と教育六の五。この地域のものでは始めての論文か）、駒沢大学の方言学会の「安倍川流域の方言調査旅行記」（方言研究Ⅰ）、寺田泰政氏の「静岡県井川村方言の音韻」、山口幸洋氏の「井川村方言語法実際」（上二つ、近畿方言双書Ⅰ）、前川秀雄氏の「浜名湖畔のアクセントについて」（音声学会会報八八）がある。東部方言の歴史について都竹の「万葉集の民謡と方言」（国学院大学の「国語研究」Ⅲ）、福田良輔氏の「奈良時代東国方言とその基層語」（国語国文二四の一一）、福田氏の「奈良時代東国方言の周辺―言語基層・八丈島方言・補説―」（文学研究53）、金田弘氏

の「東国語脈で書かれた抄物二・三」（国語学20）、中村通夫氏の「東国方言」（国語学辞典）がある。福田氏の後者のは、「八丈島諸島に渡来した最初の日本語は南部九州や琉球諸島の古代日本語である」との説であるが八丈島・琉球の指摘が示してなくて残念。なお、牛山初男氏の「二三の語の分布から見た関東、東海、東山方言の境界線について」（信濃、七の一。大事な論文）、都竹の「日本語の方言、東日本の巻」（講座日本語Ⅲ、日本語の種々相）がある。

**中部地方の西部**では、芥子川律治氏の「方言の旅、愛知県」（国語講座一の四）、黒田秀一氏の「撥音の多い三河ことば」（言語生活五月）、大田栄太郎氏の「方言の旅、富山県」（国語講座一の四）、平岡伴一氏の「方言研究の一方面―富山方言の係助詞『のことは』―」（近畿方言双書Ⅰ。大事な論文）、富山市教育委員会の「富山市児童言語調査（動詞篇）第五集」、佐伯安一氏の「礪波民俗方言集稿、第6・第7」、岩井隆盛氏の「方言の旅、石川県」（国語講座一の二）、岩井氏の「石川方言のアクセント・長音・強音―アクセントが推移する過程とその条件の仮定―」（金沢大学教育学部紀要Ⅲ）、岩井氏の「加賀と能登の『挨拶語』」（言語生活六月）、岩井氏の「能登の『応答』」（言語生活九月）がある。九学会の報告として「人類科学」7には柴田武氏の「能登方言の分布」、岩井氏の「言語の特徴と集団の出自―能登輪島の海士部落について―」があり、「能登―自然・文化・社会―」には岩井氏・金田一氏・柴田氏・野元氏・芳賀氏の「方言の諸相」（大事な論文）、柴田氏の「言語生活―敬語の社会心理学―」、岩井氏の「言語から見た海士の出自―付、能登の言語と過去」がある。石川考古学研究会の「旧福野潟周辺綜合調査報告書」には浜野三郎氏の「『ことばがけ』と生活感情」、岩井氏の「志賀方言の概観」、卯木文敬氏の「〃藁〃文化の方言的考察」、室矢幹夫氏の「中甘田村の方言の一、二について」がある。珠洲市春日神社社務所の珠洲郷土研究会の雑誌「すずろものがたり」には馬場宏氏の「木郎方言考（8・9・10）」（一九・二〇・二一号）、細川秋堂氏の「おとしべ物語」（二〇号）、坂下喜久次氏の「舌切雀」（一八号）のように、くわしいすぐれた研究や資料がある。馬場氏のは木郎（モクロウ）地方の方言の文法体系の記述で、方法は古いが読むべき大事な論文である。なお、永江秀雄氏の「若越の方言」（言語生活六月）、佐藤茂氏の「方言の旅、福井県」（国語講座一の四）、佐藤氏の「福井県の言語調査（4）」、ふたたび敬語について」（福井大学学芸学部紀要Ⅰ、人文科学第4号）、佐藤氏の「補助動詞について―共通語と地方語との問題―」（近畿方言双書Ⅰ）、永江氏の「カワッパ川太郎」（言語生活一二月）がある。中部地方全体としては牛山初男氏の「中部日本に於ける二・三の語の分布」（近畿方言双書Ⅰ）、都竹の「中部地方の方言」（国語学辞典）がある。

**近畿**に入って滋賀県に熊谷直孝氏の「湖北地方の語彙用例」（近畿方言双書Ⅰ）がある。三重県では三重大学学芸学部国語研究室方・堀田要治氏方・倉田正邦氏方を事務所とする三重県方言学会が活動していて、雑誌「三重県方言」第1号を出した。その中に東条操氏の「発刊に寄す」、楳垣実氏の「三重県方言の特殊性」、杉浦茂夫氏の「南牟婁郡（旧）木本町のアクセントについて」、遠直（オウ）巳氏の「『あなた』に関する三重県の俚言」、石倉武七氏の「紀伊長島を中心とする地域の敬語表現について」、堀田要治氏の「オイマス（会います）」、北岡四良氏の「鳥羽市鳥羽方言の素描」、北浦

譲氏の「伊賀地域に於ける児語の研究Ⅰ」、倉田正邦氏の「志摩菅島の方言」、倉田氏の「三重県方言研究史」がある。また、矢野文博氏の「三重方言に於ける口蓋化音について」（三重大学学芸学部研究紀要13）、倉田氏の「三重県樹名方言語彙」（伊勢民俗二の三・四）、藤原与一氏の「南紀（三重県）南牟婁郡下の文アクセント」、楳垣実氏の「志摩方言―文例訳利用の一例―」（上二つ、近畿方言双書Ⅰ）がある。最後の楳垣氏のは、方言の記録を読む人が必ず心得るべき方法。ほかに、多気郡大杉谷村を記した倉田氏の「食習語彙と食習」がある。京都府には楳垣実氏の「方言の旅、京都府」（国語講座一の三）、奥村三雄氏の「丹波方言の概観―方言区画の問題―」（近畿方言双書Ⅰ）、奈良県には西宮一民氏の「奈良県方言南北区画線」、岸田定雄氏の「大和諸藩の武家言葉とその影響」（上の二つは近畿方言双書Ⅰ）、都竹の「奈良県北部方言覚書」（近畿方言双書Ⅲとして）がある。大阪府には前田勇氏の「方言の旅、大阪府」（国語講座一の一）、前田氏の「現代大阪語の子音―録音逆聴による考察―」（音声学会会報八七）、前田氏の「大阪方言における動詞打消法」（近畿方言双書Ⅰ）、山本俊治氏の「大阪方言における文末助詞『ナ』」（同）、本山千代氏の「中学生の実態観察―貝塚市（山手方言）の例―」（同。大いに為になる大仕事）。楳垣実氏の「船場言葉」（近畿方言双書Ⅱとして）はこの方言に対する始めての科学的研究。和歌山県では和歌山市小松原通九の一、桜屋書房を事務所として和歌山方言学会が活動しており、雑誌「和歌山方言」の4号・5号・6号を出した。4号には楳垣実氏の「紀州ことば（敬語その4）」、岸田定雄氏の「熊野のことば（下）―瀞峡・北山峡付近を中心として―」、村内英一氏の「語法調査票試案」、宣風庵主人遺稿の「紀北地方に慣用せられている形容的比喩句集（三）」、水口清氏の「方言一房事するとは」があり、それの第五号には楳垣氏の「紀州ことば（5）」、村内氏の「雑賀崎の方言」、楠見敏雄氏の「有田郡五西村方言語彙について」があり、それの6号には「和歌浦方言（特に漁業関係）覚え書き」、村内氏の「『やにこい』攷」、水口氏の「山林用語」、小川悟氏の「安楽川町における言語二十四時間調査」がある。ほかに村内氏の「方言の旅、和歌山県」（国語講座一の二）、村内氏の「否定表現の語法」（近畿方言双書Ⅰ）、村内氏の「新宮アクセントの研究」（音声学会会報八九）、佐藤良雄氏の「熊野方言ノッタイ考」（駒沢大学の「方言研究」Ⅰ）がある。兵庫県では神戸市東灘区御影町、神戸大学文学部国文学研究室を事務所とする兵庫県方言学会が活動していて、雑誌「兵庫方言」1号・2号を出した。1号には奥里将建氏の「『兵庫方言』の創刊にあたつて」、楳垣実氏の「兵庫県の方言と問題点」があり、2号には壁谷真薩氏の「神戸方言『あんなに、こんなに』」、玉岡松一郎氏・原朗氏の「東播の方言」、佐伯隆治氏の「西播の方言」、山本俊治氏の「阪神間の方言」、服部敬之氏の「『淡路の方言』放送まで」、岡田荘之輔氏の「〃たじまことば〃の特相」、和田実氏の「NHK方言の旅『兵庫県』」がある。ほかに岡田荘之輔氏の「たじまことばと上方ことば」、（近畿方言双書Ⅰ）、佐伯隆治氏の「赤穂方言の特殊語法」（同）、和田実氏の「高砂」（同）、和田氏の「方言の旅、兵庫県」（国語講座一の四）、原朗氏の「播州方言の助詞」（神戸大学の「国文論叢」4。高砂方面のもの）、豊岡の八条小学校の黒坂勝己氏の「本校下児童の生活語の考察―音韻変化を中心として―」、印南郡中学校国語科主任会の「印

南郡方言集、第一集」がある。これらのうち和田氏の「高砂」は高砂の年寄たちの自由な会話の録音を書き取ったもので、これには言いまちがいであるとの注やアクセントの印もつけてあって、これによってわれわれの水準が四十年前のポリワーノフ氏を追い越すことができたことを喜ぶ。近畿全体では、原田芳起氏の「ダ行ザ行間の訛りについて―その誘因に関する臆説―」（近畿方言双書Ⅰ）、藤本秀雄氏の「原田先生の『ザ行・ダ行間の誤について』に対する私見」（兵庫方言2）、福山昭雄氏の「〃傘サイセ行ケ〃について」（近畿方言双書Ⅰ）、金田一春彦氏の「近畿中央部のアクセント覚え書き」（同）、楳垣実氏の「近畿方言の文末助詞「サ」」（近畿方言20）、笹谷良造氏の「近畿の方言から」（民間伝承九月）、楳垣氏の「関西弁対東京語」（教育技術、中学国語、五の七）、楳垣氏の「近畿地方の方言」（国語学辞典）がある。近畿方言学会の雑誌「近畿方言」は20号までで終りで、そのかわりにこの会は「近畿方言双書」を出し始めた。これのⅠとⅢとは東条先生の七〇回目の御誕生日をお祝するためのもので、これのⅠはA5判四百ページ余りで、この年の大きな成果の一つで、大事な論文で満ちている。

**中国地方**では、石黒武顕氏の「方言の旅、鳥取県」（国語講座一の四）、広戸惇氏の同じく「島根県」（同一の二）、岡義重氏の「ことば」（民間伝承九月。簸川郡）、大庭良美氏の「石見日原村聞書」（常民文化研究74として）、加藤ともえ氏の「備中ことば」（言語生活三月）、虫明吉治郎氏の「方言の旅、岡山県」（国語講座一の三）、藤井継男氏の「ふるさととことば」（言語生活一月、備後東部）。三ケ尻浩氏の「尾道地方の方言」（近畿方言双書Ⅰ）、原田英雄氏の「広島方言概要」（単行本、かなりまとまったもの）、原田氏の「広島（安芸地区）の方言の長母音化」（近畿方言双書Ⅰ）、河野亮氏の（広島弁の形容詞）（言語生活三月）、藤原与一氏の「方言文章論試作」（国語学20。安芸八幡村）、藤原氏の「方言の旅、広島県」（国語講座一の二）、見出政男氏の「山口県における方言の調査」（国語教室20）、藤原氏の「中国地方の方言」（国語学辞典）がある。

**四国**には草薙金四郎氏の「方言の旅、香川県」（国語講座一の四）、新垣宏一氏の同じく「徳島県」（同一の三）、山名邦男氏の「徳島県下の音調」（兵庫方言1）、野口長年が書いて後藤捷一氏が写した「阿波祖谷山古言方言」（近畿民俗17）、武田明氏の「祖谷山民俗誌」（民俗選書の一冊として）、楠橋猪之助氏の「方言と国語教育」（愛媛国語研究会の「国語研究」20号。今治地方の単語集）、杉山正世氏の「愛媛県下の甲種アクセント」（愛媛国文研究4）、杉山氏の「方言の旅、愛媛県」（国語講座一の二）、土居重俊氏の同じく「高知県」（同一の一）、桂井和雄氏の「土佐山民俗誌」、和田実氏の「四国地方の方言」（国語学辞典）がある。本州西部・四国全体については楳垣実氏の「日本語の方言、西日本の巻」（講座日本語、日本語の種々相）がある。

**九州**には堤妙子氏の「北九州の『ち』『ちゃ』」（言語生活九月）、望月克巳氏の「久留米地方の終助詞と接続助詞」（言語生活一二月）、梅林新一氏の「既刊郷土文献方言集(福岡県)」、都築頼助氏の「方言の旅、福岡県」（国語講座一の一）、松田正義氏の「方言の旅、大分県」（国語講座一の二）、糸井寛一氏の「Himesima: toti to kotoba (2)」（ローマ字世界一一月）、水口清子氏の「姫島

のことば」（言語生活一二月）、林亨氏の「豊前浄瑠璃」（言語生活八月）、松田正義氏の「大分県方言の旅、第一巻」がある。最後のは糸井氏とともに各郡二ヵ所ずつ、厳密な学問的な方法で録音したものを文字化したもの。これこそ文化国家にふさわしいもので、この年の大きな成果の一つ。惜しいことにアクセントの印がない。これに対して文部省の出版助成金が与えられることを望む。また夏田恭子氏の「北日向の拒絶のことば」（言語生活八月）、岩本実氏の「方言の旅、宮崎県」（国語講座一の三）、後藤道雄氏の「佐賀方言考（含俚諺）」（佐賀郷土研究6）、志津田藤四郎氏の「佐賀ことば」（言語生活九月）、小野志真男氏の「方言の旅、佐賀県」（国語講座一の四）、西島宏氏の同じく「長崎県」（同一の三）、杉本つとむ氏の「ツンベルグの日本語観察」（国語学21）、秋山正次氏の「天草下島のクワ〳〵パの訛音」（不知火8）がある。田中正行氏の「肥後方言由来記」（単行本）は百項目ほどの単語の分布と語源とで、材料は昭和六年のもの。鹿児島県では安藤佳翠氏の「兵児とヘコ」（鹿児島民俗4）、安藤氏の「風習とことば」（同5）、椋鳩十氏の「なき声と鹿児島語」（言語生活三月）、山下文武氏の「奄美大島方言4、5」（鹿児島民俗4、5）、上村孝二氏の「奄美大島方言の発音について」（鹿児島大学文科報告四。大事な論文）、昇曙夢（ノボリショム）氏の「『ナキ』と『ナミ』」（毎日新聞三月一日）、吉川久雄氏の「奄美大島ハブよけの呪文」（言語生活三月）、柴田武氏の「方言の旅、鹿児島県」（国語講座一の一）がある。九州全体については原田芳起氏の「九州方言に現われた弱母音化通則(二)」（音声学会会報87。大事な論文）、前田勇氏の「日本語の方言、九州の巻」（講座日本語、日本語の種々相）、前田氏の「九州地方の方言」（国語学語典）がある。

**旧沖縄県**については、服部四郎氏の「沖縄方言の言語年代学的研究」（民族学研究一九の二）があり、これには東京・京都・那覇・首里・与那嶺の各方言の基本語いの表がある。同じ号の金関丈夫（カナセキタケオ）氏の「八重山群島の古代文化」という論文は、琉球人はもとは日本語を学んだインドネシア人であったとの説であるが、これには都竹もほかの多くの研究家も賛成しない。ほかに金城朝永氏の「琉球語」（国語学辞典）、金城朝永氏・服部四郎氏の「付、琉球語」（世界言語概説下）がある。最後のもののうち「文法」は服部氏のもので、首里方里の体言・用言の活用体系であって、今までの諸方言の方言文典のうちではもっともくわしく、上村幸雄氏によれば「文法記述の手本」である。なお、金城氏がなくなられたことは、どんなに惜しんでも惜しみきれない。

## 三、印刷物（全国的）

**全体的**なものとして、篠原寿雄氏の「方言をいかにみるか」、望月信彦氏の「方言形成と人間性」、清野信雄氏の「言語生活について」（以上駒沢大学の「方言研究」Ⅰ）、水野碩翁氏の「二重言語生活」（駒沢大学の「方言研究」Ⅱ）、山内不二吉氏の「地方なまりの日本語と日本語なまりの英語」（成城文芸Ⅲ）、石垣福雄氏・村内英一氏・広戸惇氏・都築頼助氏の「東京語はひろがる」（言語生活二月）、同じ号の和田実氏・岩井隆盛氏・村岡浅夫氏・小野志真男氏・上野勇氏・北条忠雄氏の「方言と共通語との交流」、藤原与一氏の「地方語（方言）の成立」（教育技術、中学国語、五の三）、柴田武氏の「方言から共通語へ」（言語生活二月）、秋岡

留治氏の「標準語と方言」（国語教育41）、飛田隆氏の「方言と言語教育」（児童心理九の八）などがある。さて、平山輝男氏の「方言研究について」（日本のコトバ5）、金田一春彦氏の「方言」（世界言語概説下、日本語）、それから「国語学辞典」の記事は初歩の方にも専門家にもぜひ読んでもらいたい。

**専門別**では池上二良氏の「等語線について」（国語学20）、大岩正仲氏の「方言区画について」（近畿方言双書Ⅰ）、平山輝男氏の「言語島の音調体系成立とその解釈、（付）音調の境界線」（国語と国文学一二月）、柴田武氏の「日本語のアクセント体系」（国語学21）はともに大事な論文。（柴田氏の考え方には賛成・反対の議論がやかましい。）ほかに柴田氏の「アクセント変化の一面」（駒沢大学の「方言研究」Ⅱ）、藤原与一氏の「方言『文』アクセントの『後上がり調』について―特質化傾向―」（国語国文二四の一〇）、原田芳起氏の「比較文法の試み、くさ・くさい・さ」（近畿方言20）、佐藤良雄氏の「蜻蛉音韻考」（駒沢大学の「方言研究」Ⅱ）河原宏氏の「かまきりの方言の系統とその分布(1)(2)」（信濃七の一、七の二）、河原氏の「二三の虫の方言」（信濃七の四）、河原氏の「まつかさとどんぐりの方言」（信濃七の六）、前川文夫氏の「植物民俗問答」（高志路一六二）、倉田悟氏の「越後の樹と人Ⅰ Ⅱ」（高志路一六四、一六五）、中平解（ザトル）氏の「葛と藤―カ行とハ行―」（民間伝承九月。これにはカ行・ハ行相通の例が多くのせてある）倉田悟氏の「東三河のドロボーノキ」（名古屋営林局報、みどり六の四）、倉田氏の「段戸のガーボシ」（同六の五）、倉田氏の「ビンカ峠に寄せて」（同七の一）、倉田氏の「木曾谷の阿呆ダラ」（同七の二）、浅野健二氏の「ムカサリ考」（朝日新聞一一月一〇日）、坂口一雄氏の「アッチ山考」（日本民俗学三の一）、柳田国男氏の「どうもありがとう」（日本語さまざま）がある。この年には値段は恐ろしいが土井忠生氏訳の「ロドリゲス大文典」が出た。また、民俗学研究所の「綜合民俗語彙」が続き物で三典出た。なお随筆のたぐいは西尾実氏編の「日本語さまざま」を見ていただきたい。方言に縁の近いものに「国立国語研究所報告8、談話語の実態」（おもに中村通夫氏あむ）があって、これも読むべき本。最後に、昭和二十九年度の方言学の「展望」（芳賀綏氏書く。国語学21）がある。

これを書くにあたって、民俗学研究所の「分類民俗学文献目録」（日本民俗学三の四）とそこの鎌田久子氏、国立国語研究所の有賀憲三氏そのほか資料室の方方、東京大学の国語研究室、東京都立大学の国語研究室、グロータース氏、金田一春彦氏、芳賀綏氏にお世話になりました。あつく御礼申し上げます。